

南海トラフ

南海トラフとは

トラフとは、海洋プレートの沈み込みなど成因は問わずに生じた海底を走る長くやや幅の広い溝のうち、最大水深が6,000mを超えないもののことである。なお、海洋プレートの沈み込みに伴って生じた海底にある溝のうち、深さ6,000m以上のものは「海溝」と呼ばれる。こうしたトラフや海溝は非常に活発で大規模な地震発生帯となる。日本は、北米、ユーラシア、太平洋、フィリピン海の四つのプレートの上に存在するため、日本近傍には南海トラフや相模トラフ、日本海溝、千島海溝などが存在する。南海トラフとは、駿河湾から九州にかけての太平洋沖のフィリピン海プレートと日本列島側のユーラシアプレート等の大陸側のプレートが接する境界に形成されているトラフのことであり、中央防災会議防災対策推進検討会議は南海トラフにおける巨大地震の発生の切迫性を指摘している。

南海トラフの巨大地震とは

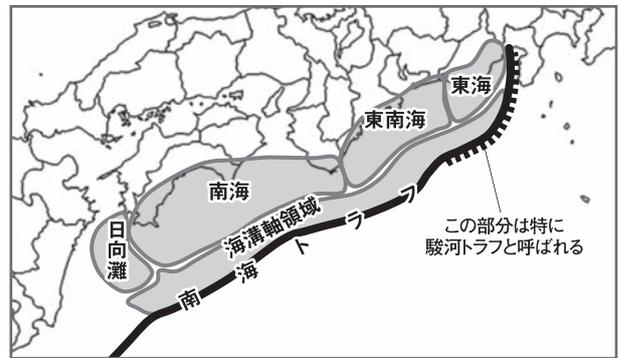
中央防災会議防災対策推進検討会議（以下、中央防災会議）では、南海トラフの巨大地震を、南海トラフにおいて100年から150年程度の周期で発生するマグニチュード8クラス以上の海溝型地震としている。

南海トラフの巨大地震として、近年では、安政元年（1854年）に安政東海地震と安政南海地震が、昭和19年（1944年）に昭和東南海地震が、昭和21年（1946年）に昭和南海地震が発生している。このため、東海地震については158年間の空白があり、また、東南海・南海地震については前回地震から60年余りが経過していることから、今世紀前半にもこの地域での地震の発生が懸念されている。内閣府により現時点の最新の科学的知見に基づき最大クラスの地震・津波が検討され、マグニチュード9クラスの巨大な地震・津波となる可能性があることが推計されている。

連動地震

中央防災会議では、複数の海溝型地震、活断層型地震が連動して発生する地震を連動地震と呼んでいる。南海トラフの連動地震については、過去に3つの震源域（南海地震、東南海地震、東海地震の震源域）のうち、2つ、あるいは3つの震源域が連動して発生し、大きな被害をもたらしたことがある。なお、東海地震は単独で発生したことがなく、東南海地震か南海地震に連動して起きている。

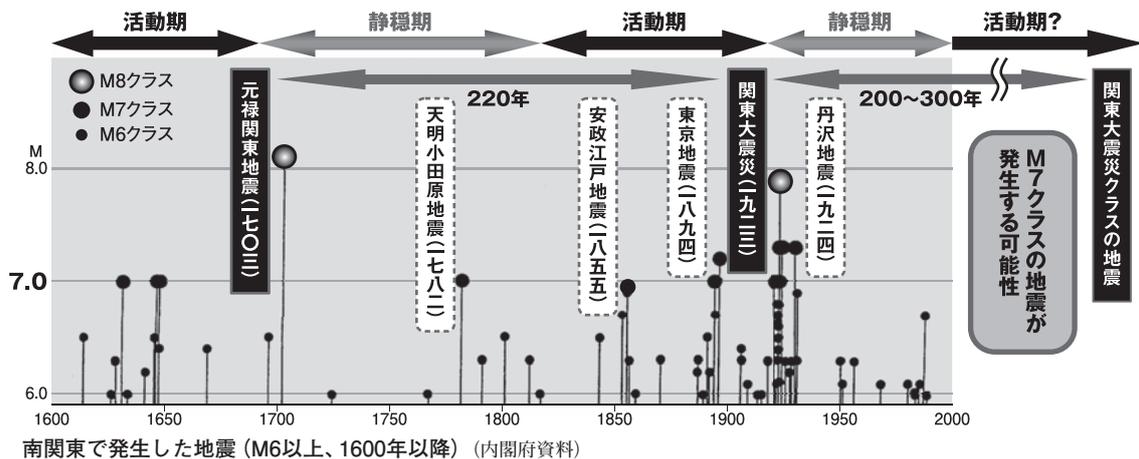
一般的に、東海・東南海・南海地震に九州側の日向灘地震の震源域も連動する地震を4連動地震と呼び、さらに、これに南海トラフ沿いの海溝軸を震源域に加えた地震を5連動地震と呼んでいる。



南海トラフの震源域のイメージ

首都直下地震

中央防災会議は南海トラフにおける巨大地震の他の大規模地震として、首都直下地震の切迫性も指摘している。首都直下地震とは、大正12年（1923年）に発生した関東地震（関東大震災）のように、200～300年間隔で発生するマグニチュード8クラスの海溝型巨大地震に加え、海溝型の地震の発生する間に首都圏で数回発生するとされているマグニチュード7クラスの地震のことである。現在、関東地震から約90年を経過したところであり、次の海溝型地震の発生は、今後100年から200年程度先と考えられている一方、マグニチュード7クラスの首都直下地震の切迫性が指摘されている。



[参考] 防災白書、内閣府資料、中央防災会議資料等